



およそ四十年間勤務し続けた佐久総合病院を三月いっぱい定年退職する。勤め始めて一ヶ月目にはもう辞めることばかり考えていたのに、なぜか居続けてしまった。

この病院は、東京帝大医学部外科医局員時代に治安維持法違反容疑で一
年間勾留されて
いた経歴を持つ
若月俊一の強烈
な指導力によっ
て、農村医学を
標榜する長野県一の大規模病院になった。

研修先にここを選んだのは、若月俊一の思想に惹かれたわけではなく、生まれ在所の群馬の山村にいちばん近い研修指定病院だったゆえだ。三歳で母に死なれたこの身の存在の世話をしてくれた祖母がまだ健在だったから、彼女の近くに居てやりたかった。

しかし、医学部卒業生数が現在の半分以上の時代、地方病院の医師不足は甚だしく、充分な研修を受けられないまま現場に放り出された。

朝、出かけて行って患者さんの臨終に立ち合い、ベッドを囲む家族たちのすすり泣きのなかで死亡時刻を告げる。夜、病棟からの電話で呼び出され、末期の患者さんのベッドの脇で呼吸困難を和らげる薬の投与量の調節を続け、明け方、いたりませんで、と頭を下げる。

南木 佳士 作家

医師は卒業するけれど

他者の死を見続けているうちに、じぶんが何をしているのかまったくわからなくなってきた。少なくとも、それまで読んできた医者もの小説には、これほど不条理な医者の日常は描かれていなかった。美人の看護師との恋愛場面は多く出てきたが。

ならば書いてやろう。信州の田舎町の総合病院で、患者さんの死を前におろしているみつともない若造の姿をそのまま小説にしてみよう。これが書き始めた動機の一

端だが、医者では自己実現を果たすのは無理そうだから、小説で、との思いもあった。ただ、医療現場を書くからには、どこまでも「わたし」にこだわる純文学でなければだめだった。文学界新人賞の選評で清岡卓行氏が「アクチュアリテイの詩」ということばで、現場をきちんと描くことの大事さを支持してくれたのはとても励みになった。

また、芥川賞の常連落選候補だったころ、山崎正和氏が新聞の文芸時評で「平穏な日

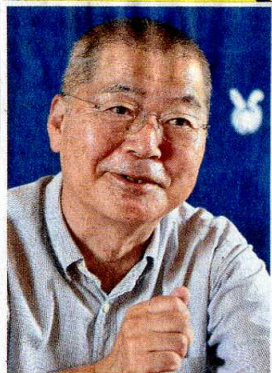
常は危うい感情の宙吊りの結果だが、それが感情の独善を防いでいる」と、作品に込めた思いを精確に評してくれ、書き続ける気力が湧いた。

病院にあっては医師、家では作家。二つの仕事を峻別するのは生きるマナーそのものだった。家族旅行は皆無で、兼業の無理がたたって心身を病み、それでもなんとか定年退職まで二足のわらじをはいてよろけつつ歩んできた。

最近、なんだか楽に歩めるので、よく見てみれば、わらじは二足ともほとんど擦り切れている。これからは皮膚のぶ厚くなった素足で歩く。

(南木佳士さんは今回で最終回です)

二足のわらじのマナー



なぎ・けいし 彼岸で出かけた群馬の山村の、祖母や母の眠る裏山の墓はまだ雪に埋まっていた。登山靴を蹴り込んで段を刻み、医業の終了を報告。陽はただひたすらうららかに、手を合わせていても思いは深化せず、こんな曖昧な終わりは望んでも得られない有難さを知る。